

## 朝顔の始末

月乃可南

毎年、秋になると悩むことがある。それは、いつ朝顔を片づけるか、だ。秋風が吹きはじめるときになると、朝顔は急速に元気をなくす。葉は新しく出てきても決して大きくならず、緑も濃くならないまま、すぐに黄色から茶色に変わる。蔓もところどころ枯れてきて、支柱ばかりが目立ってくる。それでもあきらめきれないのは、ちらほらとでも花をつけることがあるからだ。何日か続けて咲かなかつたから、もう終わりだろう、明日こそ片づけようと思っていると、その翌朝に蔓の先で小さな花が開いていたりする。あきらめられないなら、枯れるまで待っていてもよさそうなものだが、それはそれでまだどこかさびしいのである。今年も毎朝その数を数えた朝顔は、種をとっては次の年に植えるのを繰り返して五年目になる。最初は斑入りの大輪の花をつけたのだが、三年目ぐらいからは群青色の小さめの花しかつけない。聞くところによると、植物は品種改良をしても野生に戻ろうとする性質があるらしい。それでも、種や苗を買いなおそうと思ったことはない。

いまの朝顔の苗を買ったのは、祖父の家の近くだった。私はその日、朝から祖父をたずね、夕方になったので散歩に付き添っていた。あるお寺に向かう参道がおきまりのコースだった。

「あ、朝顔の苗が出てる。買うから、ちょっと待って」

「何？ 何を買うの？」

「アサガオ」

「ほお」

「夏になったら、毎朝、まるい花が咲くやつ

よ」

「ほお」

品定めをしている私に祖父が唐突にたずねる。

「いくらだい？」

「ひとつ百五十円ですって」

「いくつ買うの？」

「ふたつ。青っぱいのと赤っぱいの」

「三百円か。あんた、金持ちだね」

祖父はおおげさに言っつて、私と店の人を笑わせた。祖父もそれを見て、へへ、と声を出して笑った。

「しつかりしてらっしゃいますねえ」

朝顔の苗を白いビニール袋に入れながら店の人がそう言うのに、私はあいまいに笑って応じた。

もしかしたら、わざと惚けたふりをしてい  
るのではないか……？  
私は疑いとも期待

ともつかない気持ちで、店の入口の椅子にいつのまにかちゃっかり腰かけている祖父を見た。

その日、私は朝からずっと私が誰であるかを言いつづけていたのだった。

「おまたせ」

勘定をすませて声をかけると、祖父は知らない人を見るような表情で、ゆっくりと私を見上げた。

「さあ、帰りましようね」

自分でも驚くほど大きな声が出た。前を通り過ぎた人がふりかえった。

「おお、すみませんね」

祖父は夢からさめたように言い、私の腕と杖をささえに立ち上がった。

祖父と私は参道のゆるやかな坂道をゆっくりと登りはじめた。私は左手に朝顔の入った袋を持ち、右手は祖父の背中に添えるともなく添えていた。

五月の夕方の日差しは夏の訪れをじゅうぶんに感じさせるほどまぶしかった。参道は白っぽく見え、どこまでも続くような気がした。祖父の背中が少し汗ばんでいた。

あきらめきれない朝顔をあきらめるのに、私は毎年、金木犀の香りを使う。

秋も本格的になるころ、すべての金木犀が示しあわせたようないっせいに香りを放つ朝がある。それで、私は気持ちにけりをつける。

く  
した  
今年、  
私は  
まだ  
思い  
切れ  
ずに  
いる。  
その日はすでに過ぎた。  
しかし、祖父を亡